Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 12　2014 秋　（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷5-32-21　tel. 03-3814-0131　http://www.msz.co.jp

我思う、故に……

池内 了

科学と社会の関係をもっと掘り下げて考え、科学を学ぶ学生や院生の教育に活かさねばならないと考えるようになったのは、一九九五年のことであった。この年の一月に阪神・淡路大震災が起こり、三月にオウム真理教事件が勃発し、一二月に高速増殖炉「もんじゅ」のナトリウム漏出事故が引き起こされ、というふうに科学や技術に関わる三つの異なったタイプの大きな事故・事件が相次いで起こり、その原因や今後の科学の在り方について考えさせられたためである。

実際に考え議論したことは、震災では地震の予知と複雑系の科学について、オウム真理教事件では大学における科学の教育について、そして「もんじゅ」の事故では原発に関わる技術についてであり、どれ一つでもさまざまな角度から議論でき、かつ社会と深く関わり合う科学の話題であった。ちょうどその頃から新聞などに科学評論の文章を寄稿していた私は、この年から本格的に専門分野を宇宙物理学から科学・技術・社会論に移し始めることになったのである。

私が特に意識したのは科学の社会的受容に関わることで、複雑系の科学なら明快な解答が出せない科学と私たちはどう付き合っていくか、大学における科学教育なら「科学主義の野蛮性」（オルテガ・イ・ガセットの言葉）をどう考えるか、原発についてはその危険性をどう伝え撤退の道を探っていくか、というふうに市民と対話する感覚で、しかし科学を批判的に観る視点を忘れずに問題を投げかけることを実践していくというものであった。

それから一九年が経った。この間、私は本式に自らの専門を科学・技術・社会論とすることにし、科学を学び、そして将来も科学と携わっていくことを目指す学生や院生に対して「科学と社会」に関する講義を担当するようになった。科学者を志す若者が倫理規範をしっかり身に付け、市民から信頼される科学者として育って欲しいと願ってのことである。あたかも科学が社会の主人公であるかのように振る舞うようになった状況に、ある種の危機感を持ったためでもあった。

と同時に、どの問題も学生や院生の一人ひとりの倫理に問いかけ、それぞれが自分としてどう判断するかが迫られるようになったことも指摘しておかねばならない。つまり、私が「これが正しい答えである」と提示できる正解は存在せず、「我思う、故に……」で、それぞれがきちんと考え、それぞれの信条に沿って自分の意見を選択していくしかない」としか言えなくなったのである。いわゆる「トランスサイエンス問題」が多くなり、科学のみでは答えが出せず、広く哲学や倫理や社会的考察まで含めて考えなければならない問題に遭遇することが増えたからだ。実際に、ごく最近に学生諸君と議論した問題を挙げてみよう。

福島第二原子力発電所
（撮影 児玉房子）

複雑系に関わる問題では、三・一一の原発事故によって生じた微量放射線被曝をどう考えるかの問題である。ＩＣＲＰ（国際放射線防護委員会）のような有力な国際機関ですら「国際的原子力ムラ」という批判を浴びているのは、現在の放射線防護学が政治的に偏向している側面があるためだ。科学的に明快な答が出せない複雑系の科学にはそのような要素が入り込みやすいのである。市民から問われたとき、私たちは国際的な機関であるという権威に頼ることなく、自分自身の頭で考えて自分なりの判断をしなければならない。

科学教育に関することでは、科学の不正行為が頻発しており、（ＳＴＡＰ細胞事件でも明らかになったように）倫理意識に欠けた科学者が増加していることは事実である。その背景として、科学研究に商業主義が入り込み、また競争原理がいっそう苛烈になっていることが指摘でき、研究現場が荒れ始めていることが窺えそうである。科学が公明正大であり続けるためには、個人の倫理意識に頼らざるを得ないのだが、それが揺らいでいるのだ。ごく最近の問題として、防衛省が大学・研究機関との共同研究に本腰を入れようとしており、安倍政権の後押しもあって科学の軍事利用が本格化する気配である。研究費の獲得のためには、人殺しの手段となろうとも軍事研究に手を出すような科学者集団になっていくのだろうか。科学の場の変質に対抗するには倫理しかないことを痛切に感じている。

原発に関しては、再稼働がいよいよ本格化する状況になりつつあるが、原子力規制委員会の技術的側面のみに絞った審査基準のおかしさや、その結果を最大限に利用しようとしている政府や電力業界の動きが露骨である。そして、たとえ再稼働によって原発事故が起こった場合、誰も責任を取ることにならないだろう。そのような無責任体制の日本に果たして原発を動かす資格はあるのだろうか。

一九九五年の事故・事件から引き続き考えてきたこれらの問題も含め、さらに広げて私なりの意見をまとめたのが『科学・技術と現代社会』である。今後、科学と社会の関係がよりいっそう緊密になり、「我思う」ことが強く求められるようになるだろう。そのようなすがとなれば幸いである。

（いけうち・さとる　科学・技術・社会論、宇宙物理学）

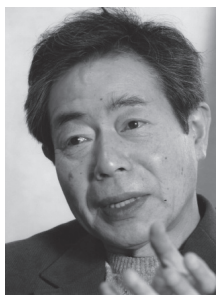
■『パブリッシャーズ・レビュー』に表示されている価格は**税別**です。

文字通りのライフワーク 圧巻の科学論

池内 了
《科学・技術と現代社会　全２巻》

右記にもある通り、一九九五年、それまで宇宙物理学を専門としてきた著者は、阪神・淡路大震災、オウム真理教事件、高速増殖炉「もんじゅ」のナトリウム漏出事故の発生をみるにおよんで、科学・技術・社会論に自分の足場を移した。科学と技術がいかにして科学・技術という一セットになったのか、それらは社会とどう影響をおたがいに及ぼしあっているのか、そこからどのような問題が新たに生じているか。専門家としての科学者は社会に開かれていなければならない。以後の著者の歩みは、科学者の社会的責任とつねに一対をなしていた。

本書は、二〇〇七年から二〇一二年、総合研究大学院大学で足かけ六年にわたって行われた講義録をもとに再構成して成ったもので、文字通り著者のライフワークを記すものである。全二巻・八〇〇頁近いこの大著には、著者が見・考え・実践してきたすべてが映し出されている。


著者近影

本論は、１ 科学・技術・社会の強い結びつき／２ 科学と技術の異質性と同質性／３ 科学の社会的意味／４ 科学・技術・社会に関わる諸事件／５ 科学と技術の歴史／６ 二〇世紀の科学と技術／７ 科学の変容／８ 科学の技術化の問題点／９ 科学者の倫理と社会的責任／10 安全性の考え方／11 エネルギー・資源問題／12 地球環境問題／13 核エネルギー問題／14 バイオテクノロジー問題／15 情報化社会問題の全15章。それに、よりリアルな語り口の課外講義６編、さらに、圧倒的な筆力で書き下ろされた80ページ余にわたる序章「原発事故をめぐって」が加わる。ひとりの科学者がよくぞここまで、との念を禁じえない。

人類の祖先が二本足歩行を始めた六〇〇万年前からＳＴＡＰ細胞問題まで、圧巻の科学論がここに誕生した。

［科学論］
【㊤十月上旬刊㊦十月下旬刊】
（四六判㊤400頁㊦384頁・各四二〇〇円）

チェス・将棋ファン垂涎の名作

チェスの神童ジョッシュとその父親が、伝説的棋士ボビー・フィッシャーへの憧憬を胸に歩んだチェスの高峰への道のりを描く。同タイトルで映画化もされた珠玉のノンフィクション。

わが子が何かの分野で非凡な才能をもっていることに気づいたとき、親はその事実とどう向き合えばいいのだろう。他の子と同じように遊んだり学んだりしてほしい一方で、才能を開花させるためには、本人に多くを犠牲にさせる必要があるとしたら？

本書の著者も、そのディレンマを抱えながら神童を育てた。6歳でチェスを始め、子供らしい無邪気さでチェスに取り組みながら、加速度的に強くなっていく息子ジョッシュ。その眩ゆいほどの才能に父親は深くいれ込み、小さなジョッシュはそんな周囲の変化に多感に反応しながらも、仮借のない勝負の世界を懸命に生き、成長してゆく。

ときに公園の片隅で、ときに世界タイトル戦の場で、さまざまな境遇のチェス棋士たちが味わう栄光と悲哀が、父子の道程に交錯して描き出される。そこには、米ソ冷戦の構図がチェス文化にもたらしたひずみや、社会的評価をめぐる諸事情が色濃く反映されている。

強くなるたびに、より高度なチェスを求められる幼い戦士とその父の歩みはどこへ至るのか。ライバルたちとの息詰まる対局の行方は。チェスの奥深さに魅入られた人々の興奮と葛藤をこのうえなく切実なタッチで写し取った名編。長く邦訳が待たれていた本作を若島正訳で贈る。

フレッド・ウェイツキン
《ボビー・フィッシャーを探して》
若島 正訳

［チェス・ノンフィクション］（四六判・372頁・二八〇〇円）

法権力の外の生を求めた修道者たち

もしも生がふるまいや言葉、沈黙において、もはや規則とは区別できないとしたら。そして使用が所有と無関係で、法の外にある生活が可能だとしたら、どうだろう。

世界的に注目を集めるイタリア人哲学者が清貧を貫いた修道者たちをホモ・サケル（法の外にある聖なる者）ととらえ、砂漠の聖者アントニウスからアッシジのフランチェスコ、「神学は哲学が終わるまさにそこで始まる」で有名なボナヴェントゥーラなどの思想を考える。

B・ゼナーレ画
《聖フランチェスコ》

異端裁判と背中合わせに生きた人々の言論に息をのむ。規則を偏執的なまでに重視すると考えられている修道主義は、人間性の未知の広がりを発見したからこそ新しいのである。所有権を拒否するだけでなく、《生》の自立のなかで《いと高き貧しさ》（「いかなる権利ももたない権利」）を法にたいして対置した彼らの挑戦は、現代を生きる人々にも示唆に富んでいる。

たとえば、決してもつことのない《使用》と、所有権を基盤にした《乱用》に、エーコ『薔薇の名前』の舞台となった14世紀の教皇ヨアンネス22世は警鐘を鳴らした。これは大量消費の基本原理を定義していないかと著者は言う。

現代思想の最前線から見た中世の知性は力強く、いつも新しいのだ。「ホモ・サケル」シリーズの一冊。

ジョルジョ・アガンベン
《いと高き貧しさ　修道院の規則と生の形式》
上村忠男・太田綾子訳

［思想・宗教史］【十月下旬刊】（四六296頁・予価四八〇〇円）

『草の花』と戦後文学

「わたしたちが『草の花』を読んで深く感動させられるのは、この愛と死の物語にひそむ、戦前から戦後にかけてあらゆる場所で失われ枯れていった、おびただしい数の草の花の運命にまで、思いをはせずにはいられないからだ。『草の花』は、たんなる愛と死を語った小説ではなく、まさしくあの暗い谷間の時代を死と直面しながら生きたものにしか書きえない、貴重な記録となっているのである」

戦前戦中に青年時代を送り、敗戦直後に新進作家としてデビュー、『草の花』で文壇的地位を確立した福永武彦。その文学的軌跡を、加藤周一、中村眞一郎ほか同世代の作家・知識人の特異性とともに浮き彫りに。昨年12月の死去直前まで書き綴られた著者の遺稿。解説・宇野邦一。

渡邊一民
《福永武彦とその時代》

［文芸評論］【九月下旬刊】（四六判・264頁・三八〇〇円）

スタイナー円熟期の批評

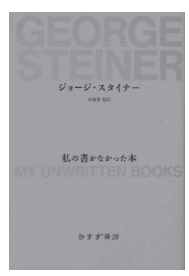
G・スタイナー
《むずかしさについて》
加藤・大河内他訳

「どこで、いつわれわれが文学テクストの研究をしているようとも、われわれはウォーフ的方法論とチョムスキー的方法論のあいだで選択をしているのだ。〔…〕文学におけるわれわれの言語の知覚は相対主義的であり、もしこういう言い方が許されるならば超ウォーフ主義的である」

ヴィゴツキーが提起した前人未到の「内的発話の歴史理論」に踏み込み、「読書行為の技術的、心理的、社会的地位の変化」を見据えつつ、文学と言語にかかわる諸学・文献とのあいだを自在に往還するスタイナー円熟期の批評。書物環境の未来への、いまこそリアルな予言書であり論争の書。表題作および「テクストとコンテクスト」「言語と精神分析に関する覚え書き」「言説の流通」「エロスと用語法」「ウォーフ、チョムスキーと文学研究者」「ダンテはいま」「書物の後には？」の全八編。

［海外文学・現代思想］【九月下旬刊】（四六判・304頁・五二〇〇円）

▼著者既刊
中国派、嫉妬、性と言語、ユダヤ人、学校教育、人間と動物、民主主義…批評活動半世紀の精髄。『**私の書かなかった本**』伊藤誓・磯山甚一・大島由紀夫訳（四五〇〇円）



博覧強記の批評家による自伝的回想＝20世紀総括の書。『**G・スタイナー自伝**』工藤政司訳（三〇〇〇円）。在庫僅少です。

キリスト教社会におけるユダヤ人を考察し、西欧文化の進歩の公理に疑念を提示する。『**青ひげの城にて**』桂田重利訳（二〇〇〇円）

症例「狼男」の実像

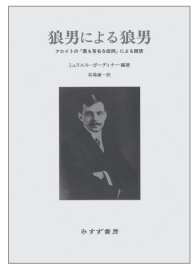
ガーディナー編著
《狼男による狼男　フロイトの「最も有名な症例」による回想》
馬場謙一訳

「フロイトの執筆したすべての症例史の中で最も精緻で最も重要なものである」とまで評される論考「ある幼児期神経症の病歴より」。この論考に登場する症例「狼男」ことセルゲイ・パンケイエフの人生は、フロイトと精神分析に出会うことで、どのように変わったのだろうか？

姉や両親との思い出、フロイトの分析をはじめとする数々の治療体験、ナチス体制下で困窮する生活、そして最愛の妻テレーゼの死……。狼男自身による回想録を中心にフロイトの後に狼男に精神分析を行ったR・M・ブランスウィックらによる多面的考察が加えられ、狼男の90年以上に及ぶ人生が詳らかにされる。

フロイトの「最も有名な症例」として生きた男の真実の姿に迫る、不朽の名著。

［精神分析学・臨床心理学］（四六判・352頁・五四〇〇円）



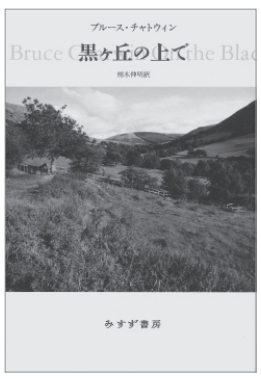
▼関連書
コーエン『フロイトの脱出』
高砂美樹訳（四八〇〇円）

「双子の弱い視力で見渡せたのは、赤や黄色や緑色に彩られた畑が網の目のように広がる大地と、そこここに点在する真っ白な農家だけだった。彼らは、そうした農家で暮らし、死んでいったウェールズ人の父祖たちのことを考えながら、ケヴィンが言ったことを信じるのは――不可能でないにせよ――とても難しいと思った。世界はいつ何時大爆発で破滅しても不思議はないだなんて、と。」

二十世紀の到来と同時にウェールズとイングランドの境界線上の家に生まれた双子の兄弟ルイスとベンジャミン。この村から一歩も出ないで二人は人生を送る。二つの大戦も、技術革新による生活の変化も、同じベッドに眠る二人にとって遠い世界だが、それでも時代の波は押し寄せる。

伝説の作家、唯一の小説

ブルース・チャトウィン
《黒ヶ丘の上で》
栩木伸明訳



髪は枕カバーより真っ白になった八十歳の誕生日、セスナに乗った双子は上空から自分たちの生きてきた「世界」を初めて眺める。そして……

『パタゴニア』で彗星の如く登場し圧倒的な筆力で多くの評価と読者を得ながら、わずか十年でこの世を去った伝説の作家チャトウィン。『黒ヶ丘の上で』は彼が遺した唯一の長編だ。没後二十五年にしてようやく名訳で到来、今日の日本社会に再浮上する。

［イギリス小説・紀行文学］（四六判・416頁・三七〇〇円）

みすず書房新刊

（2014・4～8）

東京・文京・本郷5
TEL03-3814-0131
（価格は税別です）

サルなりに思い出す事など
神経科学者がヒヒと暮らした奇天烈な日々
サポルスキー　［各紙書評で絶賛］神経科学者がヒヒと暮らした歳月を満載のユーモアと哀惜とともに綴る。**大沢章子訳**　三四〇〇円

ペスト＆コレラ
ドゥヴィル　病原菌を発見したイエルサンの人生を巧みなスタイルで小説化。面白いと評判の紀行科学史文学。**辻由美訳**　三四〇〇円

テクニウム
テクノロジーはどこへ向かうのか？
ケリー　イノベーションの普遍法則とは何か？『ワイヤード』創刊編集長によるテクノロジー版〈種の起源〉。**服部桂訳**　四五〇〇円

アメリカ〈帝国〉の現在
イデオロギーの守護者たち
ハルトゥーニアン　民主主義がテロとの戦いに至る経緯を冷戦まで遡り、ライシャワー、ネグリほかを検証。**平野克弥訳**　三四〇〇円

私のもらった文学賞
ベルンハルト　小説『消去』で日本の読者の度肝をぬいた作家の自伝的エッセー。笑いと涙、空前絶後の書。**池田信雄訳**　三二〇〇円

小さな町にて
随筆コレクション2［全2巻完結］
野呂邦暢　書くことが生きることだった作家。晩年に執筆の単行本未収録の美術エッセイ、書評等248編。**岡崎武志解説**　七〇〇〇円

良妻賢母主義から外れた人々
湘煙・らいてう・漱石
関口すみ子　近代国家の誕生と同時に、女性のあるべき姿として「良妻賢母」が作られた。国家と女性の関係を解き明かす。四二〇〇円

寝そべる建築
鈴木了二　立原道造が切り開いた新たな地平を示す表題作、「ル・コルビュジエのメディア戦略」他「零年以後」への応答。三八〇〇円

写真講義
ギッリ　「モランディのアトリエ」等、珠玉の作品を遺した知られざる巨匠による、心に響く13講。図版多数。**萱野有美訳**　五五〇〇円

イラク戦争は民主主義をもたらしたのか
ドッジ　民主制度は構築されたが政治は腐敗と暴力の渦中に。情勢悪化の原因を示す信頼の書。**山岡由美訳　山尾大解説**　三六〇〇円

〈科学ブーム〉の構造
科学技術が神話を生みだすとき
五島綾子　科学技術への盲信を煽り、科学不信や利権の源泉となるブームがいかに仕掛けられ幕切れるかを詳らかにする。三〇〇〇円

丸山眞男 話文集 続2
「福沢における文明と独立」「『著作ノート』から長野オリンピックまで」ほか全6編収録。［全4巻］**丸山眞男手帖の会編**　五四〇〇円

ロシア・ピアニズムの贈り物
原田英代　ロシア的《響き》の謎を追い、リヒテルと競った名匠の愛弟子ピアニストが教育法や技法、系譜、理念に迫る。三六〇〇円

《始まりの本》
この道、一方通行
ベンヤミン　エロスと歴史のからまりあった一本道に刻んだ断章群。ベンヤミンの代表作を瑞々しい新訳で。**細見和之訳**　三六〇〇円

ルドン、私自身に
少年の日の記憶、普仏戦争での兵士の体験、植物学者や銅版画家との交流…ルドンの言葉百の断章。［復刊］**池辺一郎訳**　四二〇〇円

死
ジャンケレヴィッチ　人類永遠のテーマを主題とする三つのモチーフが奏でる思索のポリフォニー。［復刊］**仲澤紀雄訳**　七八〇〇円

ジャコメッティ
矢内原伊作　芸術家の仕事の日夜、対話の貴重な記録。ヤナイハラの名を不滅にした書。［復刊］**宇佐見英治・武田昭彦編**　五四〇〇円

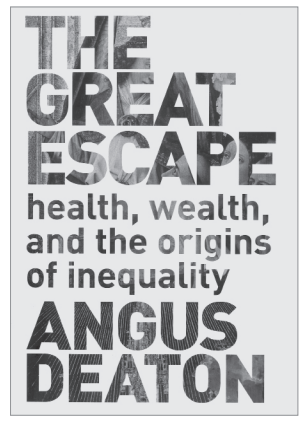
アルバム・ジャコメッティ
矢内原伊作　写真・文　アトリエで、カフェで、故郷の村で。ジャコメッティとの素晴らしい日々を写した263点。［復刊］四二〇〇円

昭和の作曲家たち
太平洋戦争と音楽
秋山邦晴　海軍・陸軍軍楽隊、日本プロレタリア音楽同盟、実験工房…大政翼賛の時代を考える。［復刊］**林淑姫編**　一三〇〇〇円

第一次世界大戦の起原　改訂新版
ジョル　運命の夏へ至る歴史のダイナミズムと精神状況を再現。初版刊行後八年間の研究を組み込む。［復刊］**池田清訳**　四二〇〇円

アメリカの反知性主義
ホーフスタッター　50年代マッカーシー旋風を受け自国の政治文化に心血を注いだ、今こそ必読の書。［復刊］**田村哲夫訳**　五二〇〇円

トルコ近現代史
イスラム国家から国民国家へ
新井政美　西洋との絶えざる交渉の中で、中央集権的「国民国家」への変身を志した三世紀を辿る興味津々の通史。［復刊］四五〇〇円



格差と寿命の関係

アンガス・ディートン
《大脱出　健康、富、不平等の起源》
松本 裕訳

現在、豊かな国々はどのように短命かつ疾病に満ちた環境から「大脱出」を果たしたのだろうか？　そして、なぜ今でも貧困と短い寿命にとらわれた国々があるのだろうか？　経済成長と平均余命とのあいだ、そして不平等と寿命のあいだには何らかの関係があるのだろうか？　グローバリゼーションは私たちの健康にどんな影響をおよぼしているのだろう？

30年以上にわたって開発経済学の最前線を走りつづけてきた著者が、ウイットにあふれる文章で人間の健康と経済成長の様々な関係を解き明かす〈保健と富の経済学〉。

『大脱走』は、第二次世界大戦の捕虜収容所から脱走する男たちの物語だ。本書における「大脱走」は貧困と早すぎる死からの人類による脱出の物語で、人類がどうやって暮らしを良くしてきたか、あとに続く者たちのためにどうやって道を切り開いてきたかを語っている。

富の歴史について語る本は数多くあるし、格差の歴史について語る本も多い。健康について、そして健康と富がいかに密接な関係にあり、健康の格差が富の格差をいかに鏡のように反映しているかについて語る本もたくさん出ている。私はその両方について一冊で語りたいと思う」

（はじめに）

健康という人間の基本的条件と経済成長の関係を、丹念に科学した、開発問題にとどまらない視野を提供してくれる必読書です。［経済学］

【十月下旬刊】
（四六408頁・予価四〇〇〇円）

『教育改革の行方を考える書き下ろし』

鳥飼玖美子《英語教育論争から考える》

日本の英語教育においては「成果があがっていない」という批判が常に繰り返されてきており、日本の英語教育の歴史は、批判のなかでの「抜本的改革」提言の歴史であった。

そんななか、かつて一九七〇年代、英語教育史に強く残る「英語教育大論争」（一九七四年）があった。その議論の厚みと多様性には参照すべきところの多い大論争であり、今だからこそ、真剣に取り組むべき重要な問題提起に満ちていた。

本書は、この論争を様々な角度から検証し、現在の英語教育、ひいては国語教育に有意義な議論を導き出す試みである。再検討から新たな提言へ。「教育改革」の行方を考える重要書。

鳥飼玖美子

有名な「英語教育大論争」を今の視点から考察し、現在の主要な論点に繋げる。小学校英語教育、中学校英語の英語による授業、TOEFL等の外部検定試験の導入、英語公用語化論など、重要問題を見すえた緊急書き下ろし。［語学・英語教育］

（四六判・224頁・二七〇〇円）

語学・翻訳を考える
既刊書のご案内

▽鳥飼玖美子『**戦後史の中の英語と私**』（二八〇〇円）▽同『**通訳者と戦後日米外交**』（三八〇〇円）▽武田珂代子『**東京裁判における通訳**』（三八〇〇円）▽宮田昇『**新編戦後翻訳風雲録**』（二六〇〇円）▽佐藤＝ロスベアグ編『**トランスレーション・スタディーズ**』（四八〇〇円）▽ガイバ『**ニュルンベルク裁判の通訳**』武田珂代子訳（四二〇〇円）▽マンデイ『**翻訳学入門**』鳥飼玖美子監訳（四三〇〇円）▽ピム『**翻訳理論の探求**』武田珂代子訳（五〇〇〇円）

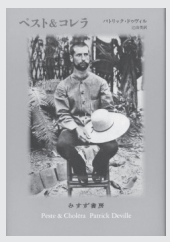
月刊雑誌《みすず》最近号より

三島憲一「ハイデガーの『黒ノート』をめぐって」／酒井啓子「アメリカ、この厄介な同盟相手」／立岩真也「発達障害の時代」（七月号）。［新連載］今福龍太「ヘンリー・ソロー　野生の学舎」／明田川融「核兵器と「国民の特殊な感情」」／舟田詠子「ドイツ人の謝罪」（八月号）。［最終回］宮田昇「諏訪紀行」／森まゆみ「移転させられる人たち」（九月号）。

連載は、小沢信男「賛々語々」／大谷卓史「メディアの現在史」／外岡秀俊「傍観者からの手紙」／鈴木晶「いつも上天気」／原武史「日記」／「池内紀の〈いきもの〉図鑑」／保坂和志「試行錯誤に漂う」／辻由美「図書館の可能性」／佐々木幹郎「山小屋便り」／植田実「住まいの手帖」／上村忠男「ヘテロトピア通信」　（各三〇〇円）

書評コラム

野崎 歓
P・ドゥヴィル《ペスト＆コレラ》辻由美訳を読む



パトリック・ドゥヴィルは一九八〇年代から九〇年代にかけて、フランスの新しい小説の旗手だった。彼は大学卒業後、アルジェで教師をしていたとき、『浴室』でデビューする前のジャン＝フィリップ・トゥーサンと知り合い、親交を結んでいる。ミニマリスムとか、ヌーヴォー・ヌーヴォー・ロマンなどと呼ばれることになる小説のあり方を、二人は一緒に構想していたのである。

ユーモラスな日常へのまなざしを特徴とするトゥーサン作品に対し、ドゥヴィル作品は「宿命の女」的なヒロインの存在と、ロードムーヴィー風の趣向によって楽しませてくれたものだった。それから四半世紀の時が立ち、ドゥヴィルの作品は一見、すっかり変貌したかに思える。やんちゃな若者小説から、歴史上の人物や出来事に取材した、いわば実証的作品へ移行したのだ。しかし同時に、かつてのいきいきとした冒険精神は失われていないどころか、いっそう大々的に発揮されていることが、『ペスト＆コレラ』を読むとよくわかる。

主人公は、パストゥール門下であり、北里柴三郎に一歩先んじてペスト菌を発見したアレクサンドル・イエルサンだ。この人物に着目した時点で、本書の面白さはかなりの程度、約束されていたのかもしれない。何しろスイス人イエルサンは、ドイツ、フランスを経てアジアに渡り、インドシナ奥地を探索。サイゴン北東の町ナトランに魅され、そこに本拠地を築いて自在な活動を展開した人物なのだ。「動かずにいる人生など、人生ではない」をモットーとするイエルサンと、ドゥヴィルのあいだには一種、精神の共振が起こっているかのようで、スピーディーな断章形式のもと、行動する科学者の人生が小気味よく活写されていく。

終生独身で、ひとり果敢に新たな領域にチャレンジし続けたイエルサンを、ドゥヴィルがしきりにランボーと重ね合わせて語っているのが興味深い。ドゥヴィルはイエルサンのうちに、絶えず越境を重ねていく近代ヨーロッパ精神のもっとも純粋な発露を見出したのだ。（のざき・かん　フランス文学）

▽**ドゥヴィル**『**ペスト＆コレラ**』（二面下に広告）

発達障害、アスペルガー症候群、ADHD… ともに生きる方法を探る

立岩真也
《自閉症連続体の時代》

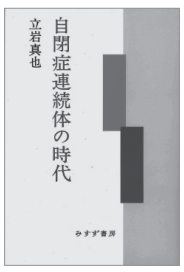
病や障害と認定されるとはどういうことだろう。認定されなければ社会のなかで生きづらく、認定されれば「自分のせいではなく、病のせい」だと免責される。では、名づけられなければ社会に居場所はないのだろうか。

その最前線が、自閉症、発達障害、高機能自閉症、アスペルガー症候群、ADHD…という「連続体」だ。病でもあり、生の様式でもあるこのあいまいな自閉症連続体は、どのように社会に登場したのか。所有と分配の仕組みのもとで、どう生きていけばいいのか。

病名がつき、対処法が発明され、治療がなされる。だが、それで解決とはいえないものがある。〈自己責任でないものについても自分に降りかかってくるのが、この社会の実際のところなのである〉（本書より）。

自分が何者であるのかをはっきりさせないと、社会の中で宙ぶらりんになり、分配の仕組みの中に入れない。自分を証明しなくていい社会は可能だろうか？　自閉症や発達障害の当事者が編み出してきた生存の方法を紹介し、社会への着地のあらゆる可能性を考え直して、ともに生きる方法を探る。［社会学］

（四六判・352頁・三七〇〇円）



イラク戦争は民主主義をもたらしたのか

トビー・ドッジ　山岡由美訳　山尾大解説　四六判　256頁　3600円

「2003年イラク介入を支えたのは、国際政治の現実的な分析ではなく、力の過信であった。その誤りを繰り返してはならない。」

藤原帰一
（朝日新聞、2014年7月15日）

2003年のアメリカ主導によるイラク進攻から10年余。イラク戦争を回顧的に検証すべき今、議論の焦点は見えにくい。明快な解説と鋭敏な分析を提供するコンパクトな一冊として高い評価を得た本書は、学術書ながら英国『エコノミスト』誌の2013年ベストブックスに選出された。暴力への依存を深めるマーリキー首相下の権威主義的体制、分裂したまま放置される社会──終戦から2012年までのイラクを明快に解き明かす。

ジョージ・パッカー　豊田英子訳　酒井啓子解説
イラク戦争のアメリカ
イラク戦争の真の問題を理解するための必読書。　四六判　4200円

E・W・サイード　中野真紀子訳
オスロからイラクへ　戦争とプロパガンダ 2000-2003
オスロ体制崩壊からイラク侵略まで。最後の評論。A5判　4500円

ハリー・ハルトゥーニアン　平野克弥訳
アメリカ〈帝国〉の現在　イデオロギーの守護者たち
アメリカ対「異質な社会」の衝突に至る経緯と問題。四六判　3400円

川端清隆
アフガニスタン
アフガニスタンにおける国連和平活動、その集大成。四六判　2500円

ジョン・キーン　森本醇訳　猪口孝解説
デモクラシーの生と死　全2巻
かつてない、画期的な「デモクラシーの世界史」。A5判　各6500円

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
http://www.msz.co.jp（価格は税別です）
ニュースレター配信中．ウェブサイトよりお申し込みください

未発表詩篇を含む新編集愛蔵版

神谷美恵子《うつわの歌 新版》

「おかげさまで　この世の生命を／こんども　とりとめました／それはそれで　ありがたいことでは／ありますけれども／もし　とりとめられない日が来ても／それは悪いことではないでしょう／この世の　いのちだけが／存在ではないのですから」（「この世のいのち」一九七五）

神谷美恵子（一九一四―七九）は晩年、狭心症、TIA（一過性脳虚血発作）のために入退院を繰り返していた。余命少なきことを感じながら、病床で綴られたノートや原稿用紙には、身近な人々、そして人間の存在をこえた大いなるものへの感謝と祈りに満ちた詩が残された。

最晩年に執筆された若き日の「うつつならぬ愛」をめぐる未発表詩篇「絶望の門」（草稿）を初めて公開するほか、単行本初収録作14編を増補。あわせて「うつわの歌」「癩者に」など戦前に発表された詩篇および訳詩「クリスティナ・ロゼッティの詩」、晩年の仕事である「ハリール・ジブラーンの詩」を収める。生誕百年を記念する新編集愛蔵版。［文学・詩］

（四六判・208頁・二八〇〇円）

▽**神谷美恵子『若き日の日記』**を十月上旬に新装復刊いたします。（予価三二〇〇円）

神谷美恵子

▼**著者既刊**

『**神谷美恵子コレクション**』（全5巻）**1『生きがいについて**』柳田邦男解説（一六〇〇円）**2『人間をみつめて**』加賀乙彦解説（二〇〇〇円）**3『こころの旅**』米沢富美子解説（一五〇〇円）**4『遍歴**』森まゆみ解説（一八〇〇円）**5『本、そして人**』中井久夫解説（二二〇〇円）／『**神谷美恵子の世界**』みすず書房編集部編（一五〇〇円）／『**ケアへのまなざし**』《始まりの本》外口玉子解説（三〇〇〇円）

建築写真家が捉えた文豪の〈眼の力〉

平山忠治《バウマイスター　ゲーテ 新版》

ゲーテと建築術

若い日のゲーテがイタリアを巡った20ヶ月の旅日記と、のちに書かれた二冊の『建築術』、そして『イタリア紀行』。この三冊をひもときながら戦後『新建築』で活躍した建築写真家、平山忠治がその足跡をたどった。写真家である自身の眼に、三次元に運動＝時間の要素を持ち込んだ独創的なゲーテの空間論――「今日の写真術の眼に近い一種の合理的視覚」が捉えた空間の構造はどう映るのか。

「ある日、一人のドンキホーテとなって旅に出た」平山の破天荒な旅の珍道中と独特のおかしみのある語り口に笑いを誘われながら読みすすめるうち、空間を見る自分の目が新しい視線を備えているのに気づいて驚かされる。プライベートのライフワーク、ゲーテ研究と本領の写真が合体した一九八〇年発行の私家版を新版で贈る。図版約320点収録。［建築・写真］【十一月下旬刊】（菊判320頁・予価七二〇〇円）

『イタリア紀行』でゲーテが訪れたローマのコロセウム（写真 平山忠治）

始まりの本

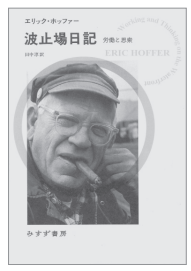
エリック・ホッファー 田中淳訳《波止場日記 労働と思索》

「現代のあらゆる大衆運動においては、教師たちが不可欠の、そしてしばしば指導的な役割をはたした。ときどき、教えたいという衝動――学びたいという衝動よりもはるかに強力で原始的――は大衆運動を盛り上げる要因なのではないかと考えたくなる」

「自己の状況に恐れをいだく人々は、自己の状況がいかにみじめなものであっても、変化に思いたらない」

「自由という大気の中にあって多くを達成する能力の欠けている人々は、権力を渇望する」

知識人はなぜ大衆と対立するのか。選民思想はどこから生じるのか。鉱山夫、季節労働者、沖仲士として、大衆とともに社会の基底を渡ってきた特異な哲学者ホッファーの思索日記。森達也による『波止場日記』解説日記」を新たに付す。【哲学エッセイ】（四六変・272頁・三六〇〇円）



フランクル『夜と霧』電子書籍で配信

精神科医ヴィクトール・フランクルが、ナチス・ドイツの強制収容所に囚われたみずからの体験を綴り、極限状況におかれた人間の尊厳の姿を余すところなく描いた『夜と霧』。世紀をこえ、世代をこえて読み返され、読みつがれている本書を、池田香代子訳の新版、霜山徳爾訳の版とともに、今秋より電子書籍で配信いたします。

電子書籍専用端末、スマートフォン、タブレット、パソコンなど様々なメディアで、フォントの大きさを変えるなど様々な読書環境で、より多くの読者の皆様にお届けしたいと考えております。詳細は、追って小社ウェブサイトにてお知らせいたします。

［新版］池田香代子訳　カバー

霜山徳爾訳　カバー

みすず書房 近刊のお知らせ

11-12月の刊行予定から

少し古い本の店　池内紀
リトルネロ
　F. ガタリ　宇野邦一・松本潤一郎訳
ベルリンに一人死す
　ハンス・ファラダ　赤根洋子訳
ツェランの詩を読みほどく　相原勝
ポーランドと他者――文化・レトリック・地図
　関口時正
青のパティニール　石川美子
量子の異常な日常
　ジョージ・グリーンスタイン　森 弘之訳
植物が語りはじめた５億年
　デイヴィッド・ビーアリング　西田佐知子訳
ヘイト・スピーチという危害
　ジェレミー・ウォルドロン　谷澤・川岸訳
ファビアン――あるモラリストの物語
　エーリヒ・ケストナー　丘沢静也訳
（http://www.msz.co.jp にもご案内）

新装復刊

2014年 秋

ヨーロッパ文明史
ローマ帝国の崩壊よりフランス革命にいたる
ギゾー　七月王政時に国政を担ったギゾーによるソルボンヌ歴史講義録。**安士正夫訳　￥3600**

ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所
矢野久美子〈現われ〉〈あいだ〉そしてアイヒマン論争の真意とは。思考の現場を追う。**￥2800**

人間機械論［第２版］
人間の人間的な利用
ウィーナー　サイバネティックスの本質を数学的記号を用いずに述べる。**鎮目・池原訳　￥3500**

ガロアと群論
リーバー　天才数学者が展開する群の考え方によって、方程式を解く方法。**浜稲雄訳　￥2800**

ヒトの変異
人体の遺伝的多様性について
ルロワ　人体形成の謎を巡る博物誌と驚異の遺伝子の世界。**上野直人監修　築地誠子訳　￥3800**

みすず書房・最近の重版より

サルなりに思い出す事など R. M. サポルスキー　大沢章子訳	￥3400
死ぬふりだけでやめとけや　谷雄二詩文集 姜信子編	￥3800
昨日の世界 2 S. ツヴァイク　原田義人訳	￥3200
人生と運命 3 B. グロスマン　齋藤紘一訳	￥4500
写真講義 L. ギッリ　萱野有美訳	￥5500
生きがいについて《神谷美恵子コレクション》 柳田邦男解説	￥1600
統合失調症 1《精神医学重要文献シリーズ Heritage》 中井久夫	￥3200
寝そべる建築　鈴木了二	￥3800
世界の見方の転換 1　山本義隆	￥3400
確実性の終焉 I. プリゴジン　安孫子誠也・谷口佳津宏訳	￥4300
全体主義の起原 1 H. アーレント　大久保和郎訳	￥4500

みすず書房 営業部だより

今年は、精神科医・神谷美恵子生誕百年にあたります。『生きがいについて』『こころの旅』など、多くの著作が名著として読み継がれていますが、さらに多くの方に手にとっていただけるように、この秋、全国の主要書店にて記念のフェアを開催します。併せて、しばらく品切となっていた『**うつわの歌**』を増補新版にて（上掲）、十月には『**若き日の日記**』を新装復刊いたします。ぜひ書店店頭でご覧いただければと思います。詳細が決まり次第、小社ウェブサイトでご案内します。

お陰様で東京国際ブックフェアが無事に終了しました。皆様から直接ご意見ご要望を頂戴できることから、みすず書房にとって大変貴重な場となっています。ご来場の皆様に感謝申し上げます。

新聞、雑誌等で大きな反響をいただいている**トマ・ピケティ『21世紀の資本』**（仮題）を、山形浩生他訳により年内に刊行する予定です。話題沸騰のベストセラーです。どうぞご期待ください。

みすず美術カレンダー2015のご案内

二〇一五年版は「セザンヌの季節」をお届けします。小社より来春刊行予定の**A・ダンチェフ『セザンヌ』**（仮題、二見史郎他訳）より、さまざまなタッチの作品８点を収めました。国際関係の研究者でありながら美術愛好家としての著作も多いダンチェフ教授が、徹底した文献渉猟を元にセザンヌを浮き彫りにする21世紀の決定版伝記です。刊行にご期待ください。

カレンダーはハガキ大、七葉にポストカード一枚付き、ペーパーケース入、卓上用です。ご希望の方は、一部六一八円（税込）と送料八二円、計七〇〇円分の切手を同封のうえ、みすず書房営業部（〒113-0033　文京区本郷5-32-21）までお申し込みください。

複数のご購入については営業部（電話03-3814-0131）までお問い合わせください。（十月中旬発売予定）